

"DESIGN × CAFE" vol.1

末光弘和+末光陽子/SUEP展

～自然と建築の新しい関係～

text KONDO yoshihiro (share space HATADERA)



↑FCAFE
"Indoor Garden Cafe"

はなくなってしまった。東京だけでなく仙台や金沢、あるいは直島といった地方から世界基準の建築が誕生している現在に至るまで……。

3年前に創刊したこの8beatで輝きを放っていた景色ですら、既に同じ姿を留めていない場合もある。そう考えれば、第3号で触れた松村の日土小学校が残されたことは、奇跡的だったのかも知れない。ただし通常、多くの人に愛されている建築を後世に残し、伝えていく事は至極当然な選択ではあるのだが。

ただ、この日土のように、愛媛で途切れかけていた建築の歴史を、もう一度紡ぎ直す機運が生まれ始めたことも事実。その一つが今回のデザイン・カフェでもあったのだ。

受け継がれる建築、新たに生まれる建築、そしてそれらが集積して形作られる街。人は建築との関わり無しには生きられず、本来は生活の中で身近な存在であるはずの建築。だからこそ、その存在を改めて肌で感じ、見つめ直す機会を作りたかったのだ。

十口限りの「共生カフェ」

そんな中、奇跡的に実現した

今回のデザイン・カフェ。ここではその輪郭をもう一度だけ辿ってみる。そのことで、今回は足を運ぶことができなかった人たちにも、この空気を感じてもらうことができれば……。

まず、今回の企画をひとことと表すなら、

「カフェと建築展のコラボイベント」だったということ。

「ガラリ」で「建築展をやり直す」それだけなら、やはり建築に興味がある人だけにしか来てもらうことはできない。しかし、そもそも意図したのは興味のない人に建築に触れてもらうこと。そこで、建築への敷居を低くするきっかけにしたかったのがカフェだった。期間限定の建築展にはたとえ興味が沸かなくても、期間限定のカフェも多いウィットに興味を示す人も多いのではな

いか。そしてそのカフェを訪れた人たちがたまたま建築の世界に足を踏み込む。安易な発想だったのかもしれないがカフェ全盛の今、その力を借りる事が効果的だと判断したのだ。

その中でも、カフェと建築展の両方に高いクオリティを求めた。最終的には企画者(share space HATADERA)の「緑」が決め手となり、今回はCAFE NEW CLASSIC/SUEP(スー

PER)が

プ)のコラボイベントになった。それぞれが目指すものは到底ここでは書き切れないが、今回のデザイン・カフェが成功した理由は、ただ単に二つの主体が一つの場所に集まっただけではなく、それぞれが互いを高め合ったこと。

その象徴が「Indoor Garden Cafe」だった。「カフェと建築展のコラボをやるからには、それぞれの空間にも統一感を持たせたい」というSUEPの提案によって、カフェの床には全面に天然芝が敷かれ、室内にはコーヒー豆の香りとともに、土芝臭い香りを漂わせた。

さらに本来は鉄、コンクリート、ガラスで構成される無機質



share space HATADERA

「愛媛に建築を」

山茶花の蕾がひとつ、またひとつと花開き、地面を薄紅色に染めていた二〇〇七年の師走。愛媛県松山市の畑寺で「DESIGN × CAFE」(デザイン・カフェ)が開幕していた。

そもそも、今回のデザイン・カフェ開催に至ったきっかけはただ一つ。
「愛媛で一人でも多くの人に『建築』に興味を持ってもらいたい」ただそれだけだった。

それでは何故か、愛媛で建築を伝えようとしたのか? 何故なら、日本の中では後進地になってしまっていたからだった。古くは丹下健三を輩出し、同じ時代を生きた松村正恒は地元愛媛で優れた作品を残し続けていた。確かに、黒川紀章や安藤忠雄、伊東豊雄といった世界に通じる建築家が愛媛にも作品を残してきた。

ただ、世界の各地からその作品を巡る旅人が愛媛の地を踏んでいたとしても、当地の人たちが寄せる関心は希薄だった。そして古き良き建築はひとつ、またひとつと時の流れと共に姿を消し、一方で、時代を象徴する建築が愛媛から発信されること

シェアスペースハタデラとは?

この空間はモノを売るのではなく、空間自体をシェア(レンタル)することで、新たな人と人、人とモノとの繋がりを生み出すことを目的とした、いわばSNSです。巷ではmixiに代表されるSNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)がネットの世界に浸透していますが、この空間のコンセプトはリアルなSNS、即ち「ソーシャル・ネットワーク・スペース」ともいえます。
例えば今回のデザイン・カフェのように、建築をテーマに人が繋がったり情報を発信したり、新しい「コミュニティ」がここで生まれる。そして、この空間で生まれたネットワークが街へと繋がる。そうなることを願って誕生した空間です。詳細は、以下のWEBにて。
<http://www.hatadera.net>



コラボカフェ・CAFE NEW CLASSIC
松山市祝谷6丁目1190-1
Tel 089-924-5506 Open 10:00-23:00



"DESIGN x CAFE" 3Fギャラリー

末光弘和+末光陽子/(SUEP.)

末光 弘和 Hirokazu Suemitsu
 1976年 愛媛県松山市生まれ
 1999年 東京大学建築学科卒業
 2001年 東京大学大学院修了
 2001年-2006年 伊東豊雄建築設計事務所
 2007年- SUEP.

末光 陽子 Yoko Suemitsu
 1974年 福岡県八女市生まれ
 1997年 広島大学建築学科卒業
 1997年-2003年 佐藤総合計画
 2003年- SUEP.



一級建築士事務所 SUEP. (スーブ)
 〒158-0084
 東京都世田谷区玉川4-21-1-203
 TEL/FAX 03-3709-5915
 E-MAIL mail@suep.jp
 HP http://www.suep.jp/

彼らの作品は松山をはじめ、我孫子や仙台など日本の各地で展開中。
 デザイン・カフェ開催時のインタビューがラフスタイル(<http://www.laughstyle.net/>)にも掲載予定。

昨今の建築は、機能性・効率性を重視し、空間の中と外の環境を分け隔てることで人工的な快適性を求めてきた。彼らの建築はその数字だけのエコロジーを語るのではなく、ましてや単に「箱」に窓を開けることで中と外の関係を近づけるものでもない。本来自然が持つ快適性を建築の空間へ落とし込むことでもう一度、自然と建築との新しい関係を築こうとしている。

その試みと共に、建築の持つ楽しさ、素晴らしさを伝えたいという彼らの新しいチャレンジがなければ、今回のデザイン・カフェが実現することはなかった。
 愛媛から東京へ、東京から愛媛へと挑戦を続ける「SUEP.」。彼らと共に建築の枠を超え、愛媛を変えるネットワークがようやく生まれた。

ある意味で建築はその地域を映し出している。決して洗練されているとはいえない街は、私たち自身を映している。しかし、その街を変えられるのも私たち自身なのだ。

カフェで外の世界(=SUEP.)の力が注ぎ込まれたことは、サッカー界の成功例を踏襲したからでもあった。ただし、今後もデザイン・カフェが愛媛の建築界を進化させる軸になるのならば、継続させることは一つの絶対条件。再び外の世界と繋がれたのだから、そこに人と情熱を注ぎ

つづあるのがサッカー界だ。愛媛のサッカー界は今、再生の道を歩みはじめた。その求心力となったのが愛媛FCという存在であり、石橋を含め愛媛のサッカーに携わる人たちの情熱だった。再び愛媛のサッカー界に確かな軸が生まれたことで、大西貴や黒田一則ら南宇和から全国へ羽ばたいた選手たちが愛媛に帰ってきた。その後も世界を経験した友近聡朗、羽田敬介ら愛媛で生まれ育った選手たちが再び故郷で輝き、愛媛FCをJリーグへと導いた。

もちろん、その影には地元で支え続けた大勢の人たちの努力がある。しかし、この成功は地

元の人間だけでは成し得なかったことも事実、外の世界を経験した愛媛出身者の力に加えて、望月一仁(愛媛FC監督)をはじめ愛媛には緑のなかった実力者たちの力を借りることで、愛媛のサッカーに再び世界への道が開かれた。

こうして愛媛のサッカー界は外の社会との正常な関係を紡ぎ直し、再び進化の道を辿り始めた。サッカーと建築には、本当はまだまだ共通する不思議な関係がある。いや、この二つの社会に関わらず、社会の構造を健全な状態に保つためには普遍的な要素があるのだろう。



"DESIGN x CAFE" Outdoor Garden

建築とフットボールの不思議な関係

このように、閉塞感の漂う愛媛の建築界の状況を打開するため、デザイン・カフェは開催さ

された。ただ、よくよく周囲を見渡せば地方において停滞、衰退を余儀なくされる社会は少なくない。愛媛で身近な例を挙げるならば、フットボール(サッカー)界も数年前まで建築界と同じ状況に置かれていた。

3Fギャラリーの作品同様、1Fのカフェでも「自然と建築の新しい関係」を提案したSUEP.。それに呼応するかのようにならなければ、そこに注ぎ込まれる情熱も枯渇しかねない。地方社会のそこかしこで起こっているこの悪循環がその地方を停滞させ、蝕む。愛媛の建築界は今なおこの悪循環を抜け出せずにいるが、逆に一足先にそこから抜け出し

一度求心力を失った地方社会が再生することは容易ではない。次代を担うはずの若く優秀な人材は故郷を離れ、飛躍の場を外の世界へ求めざるを得なくなる。今、建築でもサッカーでも世界へと繋がる道は着実に整ってきた。彼らの視線がその先へ向かうのは自然の流れだろう。しかし、次代が地元から出てこなくなれば、その社会に対する周囲の関心は遠のく。関心が薄くなれば、そこに注ぎ込まれる情熱も枯渇しかねない。地方社会のそこかしこで起こっているこの悪循環がその地方を停滞させ、蝕む。愛媛の建築界は今なおこの悪循環を抜け出せずにいるが、逆に一足先にそこから抜け出し

な空間と、鮮やかな芝生のグリーンや地植えされたシクラメンの花々とのコントラストが生み出す視覚的效果は、来場者の記憶に深い印象を残した。
 「白い扉の向こうには、小さな箱庭のような空間。室内なのに床には天然芝が植えられ、まるで公園の中のようにリラクゼーションして過ごす」SUEP.が示した内装コンセプト通り、カフェに「一歩足を踏み込めば、そこが再び「外」であるかのような不思議な、しかし心地よい空間が生まれていたのだ。

平成元年に南宇和高校が全国高校サッカー選手権大会で優勝した頃、愛媛のサッカーは絶頂期にあったのかもしれない。しかし、時の名将・石橋智之が南宇和を去って以降、愛媛のサッカーが全国に名を馳せることはほとんど無くなってしまった。